

# 知識探訪

## 多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

### 「伝統文化」は誰のものか～レガッタ・レパとバジャウ人

長津一史 (東洋大学社会学部准教授)

マレーシア政府は、1999年以來、海外向けの観光宣伝に「マレーシア、真実のアジア (Malaysia Truly Asia)」をキャッチフレーズとして使っている。その宣伝映像は、豊かな自然景観とあわせて、「伝統衣装」を身につけたマレー人、華人、インド人、サバ、サラワク両州の先住民を映し出し、文化的多様性を強くアピールしている。観光のグローバル化が従来にまして拡大する過程で、マレーシアの政府観光局は自国の多民族性を観光資源として見出した。現在、同観光局は、マレー農村ホームステイや先住民のロングハウス訪問ツアーなど、民族観光 (ethnic tourism) のさらなる振興を図っている。



レガッタ・レパ (サバ州センボルナ、2010年＝筆者撮影)

マレーシアのなかでも、多くの民族が居住するサバ州は、民族観光の「資源」に特に恵まれた州である。同州の観光局もまた、1990年代末ごろから民族文化を強調した祭典の組織と宣伝に力を入れてきた。そのなかには、在来の儀礼が観光行事化されたかたちの祭典もあれば、在地の文化要素を基盤に新たに創出された祭典もある。サバ州南東端のセンボルナで行われるバジャウ人の祭典「レガッタ・レパ」は、後者の成功例であり、毎年、1万人を超す観光客を国内外から集めている。私は2010年にはじめて、この祭典をじっくりとみる機会を得た。

レガッタ・レパは、4月の3日間、センボルナの郡役所を主催者として開催される。レパは、バジャウ人がかつて用いていた木造の小型帆船の名称である。船の長さは6～10メートル、触先には美しい彫刻が施される。レガッタと名づけられているが、祭典では速さではなく、レパの彫刻や帆の美しさ、そして船全体の「伝統性」の高さが競われる。

レガッタ・レパは1994年に始まり、2003年に州の公式観光行事に認定された。それは、センボルナのバジャウ人によって創出された観光のための「伝統」行事である。歴史の浅さをあげつらうために、創出という語を使っているのでもちろんない。観光を通じた文化の創出は、世界各地でみられる。その過程で人びとは、自分たちの文化を再

発見してきた。レガッタ・レパもまた、バジャウ人が誇りうる自文化を再発見し、「海の民」としてのアイデンティティを再構築しようとする試みであるといえる。ただ、かつてセンボルナで数年間を過ごした研究者として、私は若干の違和感とともにこの祭典を眺めざるをえなかった。ここでは一点だけ、文化の担い手について覚えた違和感を記そう。



レパに暮らす海サマ (フィリピン・スルー諸島、1994年＝筆者撮影)

レパをもっとも日常的に利用していたのは、バジャウ人のサブグループ、海サマ (サマ・ディラウト) 人々たちである。かれらこそが、かつてレパを住居とし、海に生きていた。しかし、レガッタ・レパを運営するのも、レパの「伝統性」を定めてそれを評価するのも「陸のバジャウ人」である。地域的なマイノリティである海サマ人は、それらの作業に関わっていない。他方、その海サマ人の多くも、いまでは生業の場を陸に移している。現在、レパは観光のためだけに作られ、使われている。パンフレットは、レガッタ・レパは海の放浪民として知られるバジャウ人がその伝統文化を伝える祭典であるとうたう。その伝統文化は、果たして誰がどのように担い、誰に伝えられていくのだろうか。

#### < 筆者紹介 >

1968年、札幌生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程満期退学。博士 (地域研究)。京都大学助手を経て現職。専門は東南アジア研究と文化人類学。サバ州のほか、フィリピン・スルー諸島、東インドネシアなど、島嶼部東南アジア各地の海民社会でフィールドワークを行ってきた。東南アジア海域世界における近代以降の社会史の再構築を研究の主題とする。共著書に『開発の社会史 東南アジアにみるジェンダー・マイノリティ・境域の動態』(長津一史・加藤剛編、2010年、風響社) など。